

二〇一五年一月四日 主日礼拝説教要旨  
シリーズ・信仰の父アブラハム⑧

## 目をそむける人、見つめ続ける神

(創世記一六・一〜一六)

元旦礼拝の後、吉祥寺に住む姉夫婦を尋ねた帰り、「クリぼっち」ならぬ「正月ボッチ」の私のためにお土産を持たせてくれたのだが、それと同時に「これ面白いわよ」と一冊の本も入れてくれた。タイトルは『マホメットの生涯』という。まあこういうご時世だからイスラム教について理解を深めるのもよいかもしいれないと思ひ、最初の頁を開くと軽いショックを受けた。そこにはマホメットの系図があり、アダム―アブラハム―イシュマエル、マホメットとある。既知の事とは言え、図表化されると実にインパクトがあるのだ。ユダヤ教―キリスト教―イスラム教は同根性を感じた瞬間だった。

閑話休題。今朝の個所は実にそのイシュマエルの誕生譚であるが、その物語には人間の罪の諸相と神の誠実とがこれでもかとはばかりに描かれている。以下それを見ていきたい。

### 一、人のせいにするサライ

七十五歳で最初の約束を見てから十

年の時が流れた。神は信仰の折れやすいアブラムのために何度も彼に現れ、その契約を更新してきたのだが、子どもは生まれない。そこでサライは「ご存じのように私は私が子どもを産めないようにしておられます」と言い、自らの女奴隷ハガルを側室にするようアブラムに勧めた。「主が留めている」と気がついたなら、主に祈ればよいのであるが、彼女はその道を選ばず、自らの知恵で事を成し遂げようと思ったのだ。しかし事はそう簡単にはいかない。果たしてハガルは身ごもったのであるが、彼女はかの淀君よろしく、正妻のサラを軽く見るようになった。するとサライは一転アブラムを譴責し、ハガルの増長はアブラムのせいだとたまった。どう見ても「逆ギレ」である。そこには自分が何をしたのかという反省など微塵もないのだ。

### 二、分をわきまえないハガル

サライの身勝手に比べればハガルにはまだ同情の余地があるように思うが、だからと言ってハガルが無罪と言うことには決してならない。というのもハガルはどこまで行っても「側室」に過ぎず、生まれる子どもはサライの子となることは決まっていたからである。しかし彼女は自らが妊娠するにあたって増長し、分をわきまえず、サライを見下げるようになった。ちなみに

この直訳は「彼女の女主人は彼女の目に軽くなった」となる。軽く見たのである。この思いあがった態度はやはりほめられたものではないのである。

### 三、無責任・無関心なアブラム

正室vs側室。これは古今東西を問わない女の戦いの一典型であるが、この仲裁役はやはり家長の仕事だろう。だが我らがアブラムはどうだ。なんと彼は「ご覧。あなたの女奴隷は、あなたの手の中にある。彼女をあなたの好きなようにしなさい。(六節)」と言うのみなのだ。ほつかむりを決め込んだのである。確かにサライはハガルの女主人であるから、彼の言うことも一理ある。だが学者たちはそこに責任逃れの偽りの対立があるというが、その通りだと思ふ。要は「重かった」のだ。また六節の「好きなように」は英訳(NIV)では「何でもあなたがベストだと思ふことを彼女にしなさい」となる。おそらくサライの「ベスト」はハガルにとつての「ワースト」であろうことはアブラムにも予見できたらう。だが彼はなお静観を決め込んだ。悲しいほどの無関心がそこにある。

\* \* \*

こうしてサライはハガルをいじめ、ハガ

ルは女主人を恐れて荒野を彷徨する。しかしそこに彼女を見つめる目が、彼女の嘆きを聞いていた耳があった。それは神の目であり、耳であった。神はみ使いを遣わしハガルに自らの態度を改めるよう諭した。また胎児の子孫が祝福されることを述べ更にその子の名を「イシュマエル」即ち「神は聞かれる」と名付けよと語つたのである。またハガルは神を「エル・ロイ」即ち「ご覧になる神」と呼んだ。人は往々にして神の御心を自分のお心に取替へたり、分を越えて勝ち誇つたり、裁き立場に居ながらなお洞ヶ峠を決め込み、解決を作ろうともしない不誠実な存在であるが、神はこの物語の中で最も弱く小さい存在であるハガルのうめきを聞きもたさず、その目の涙を見つめておられたのである。

八十年代の名曲にボリスの「見つめていたい」がある。何かラブソングのように思われているようだが、よく歌詞を読めば、別れた女性を何時までも見張り続ける(?! )男の嫉妬を書いた歌であることは自明だ。しかしその中の一連は奇しくも今朝のテキストにシンクロしているように思える。「君のしぐさの二つ一つも、破られるであろうどの誓いも、偽りの笑顔も、そして権利主張も。僕はずっと君を見つめているよ」罪あるアブラム一族をあきらめず、その悲しみの涙を見つめ続けるお方、それが私たちの信じる神である。アーメン。